

第 21 回荒川太郎右衛門地区自然再生協議会 議事要旨

平成 20 年 10 月 26 日(日)、「第 21 回荒川太郎右衛門地区自然再生協議会」が開催されました。今回は、太郎右衛門地区の自然再生事業実施計画の当面取り組んでいく内容の方向性について協議しました。

【議事結果】

- 上池呑口の切り下げについて、前回協議会の意見を踏まえた修正案で承認された。ゲートが適切に機能する方法について、今後検討していく。
- 当面の実施計画の施策のうち湿地及び止水環境の拡大の整備内容（高水敷の切り下げ）、河畔林の保全及びハンノキ林の保全・再生の整備内容（河畔林の保全・再生）について、事務局案の基本的な方向は承認された。詳細については、ワーキンググループにおける意見や生態系モニタリング専門委員会における協議を踏まえ、詳細を検討していく。

【主な議事内容】

●実施計画の施策（案）について

当面の実施計画の施策のうち、湿地及び止水環境の拡大の整備内容（高水敷の切り下げ）、河畔林の保全及びハンノキ林の保全・再生（河畔林の保全・再生）について、事務局案を提示し、協議を行いました。

また、上池呑口の切り下げについて、前回協議会の意見を踏まえた修正案を事務局より提示し、協議を行いました。

(主な意見)

＜上池呑口の切下げ＞

○上池呑口のゲートは、洪水時に機能しなければ水位が下がることになる。ゲートが機能するように、ゲート部に小規模な池を併せて整備するなど、ゴミなどがつまらないようにする工夫が必要である。

→ ご提案いただいたような詳細の内容については今後検討していきたい。

○上池呑口の切下げにより上池は水位変動の大きい場となるが、その水際で多様な植物が生える場所となるか、心配である。

→ 植物の生育は水位変動の発生する頻度の影響をうける。頻度が高ければ多様な環境は期待できないが、攪乱が無ければ樹木になる。どの程度の頻度が良いかに着目する必要がある。

→ 効果の発現状況に応じて対応を検討していくかたちで進めていく。

＜高水敷の切下げ＞

○外来植物に対してどのような管理方法が有効か検討する必要がある。また、今年はオオブタクサなどの外来植物の繁茂が著しかったため、早めに取り組む必要がある。

○切下げ方法は、外来植物に対する効果も考慮して検討していく必要がある。

○高水敷の切下げ実施にあたり、樋ノ詰橋下流付近の過去の埋め立て物について対策をしていく必要がある。

○赤城樋管から流入している水をモトクロス場跡地に引き込み、安定した浅い水域のある湿地を創出してはどうか。

→ 今回の掘削箇所については、「じめじめした湿地」が広がることを想定している。中池と上池の連結については、影響が大きいため当面の施策からはずしている。

○湿地創出エリアの水源として、赤城樋管の流入は重要である。水収支の現状を調査する

必要がある。

→ 過去の水収支調査結果等も含めて、次回資料を提示する。

○現状を見て場所ごとにいろいろな「湿地」をつくるということではよいのではないか。

○現状の植生状況を把握した上で、対策によりどのような種が出る場となるかわかるとよい。モトクロス場跡地は現状でさまざまな環境が形成されている。現状を一部でもよいので調査することが必要である。

→ 過去の植生調査結果を分析していく。

<河畔林の保全>

○廃棄物について対策を講じていくことが重要である。

→ 重要な問題として認識しているが、太郎右衛門地区内には民有地が多いため、どのように取り組んでいくかを検討している。

→ まず、できることから取り組んでいくしかない。例えば家庭ゴミの不法投棄抑制については、この協議会の維持管理の施策として取り組んでいけるのではないかと。

○中池側の河畔林対象地にある水田には、水田に特有の希少な植物が生育している。水田のような環境を残すことも重要である。

○水田であった箇所について、「冬水田んぼ」のような取り組みを行っていくことはできないか。

→ 田んぼの箇所について確認をします。

○河畔林の再生地について、樹齢構成や更新・再生エリアをどのように計画していくのか。

→ 自然の営力による更新は期待できないため、対策が必要である。生態系モニタリング専門委員会で検討していきたい。

<その他>

○三ツ又沼の水質が悪いが、太郎右衛門地区では土壌や水質の状況について調査しているか。

→ 原因として、主に田畑の肥料等によるものと考えられる。

○ワーキンググループにおける検討状況を紹介すべきである。

○ワーキンググループにおける意見の中で重要な部分については、協議会の資料に反映すべきである。例えば、これまでのワーキンググループでは「多様な自然環境」の捉えかたについて意見を交わしている。

→ ワーキンググループでの検討状況は協議会で情報共有していく方向である。

○ワーキンググループの進め方は検討の余地がある。

→ 検討の進め方も含め、今後ワーキンググループで話し合っ進めていきたい。

○荒川太郎右衛門事業における活動のマネジメントの仕方については、十分議論が必要である。

→ 将来的なマネジメントの方法についても、協議会で議論していく形で考えている。

○ワーキンググループの開催について、ある程度計画的に開催するようにしてはどうか。

○廃棄物の埋設箇所について、情報を出し合うようなことをしていくと良い。

○試験地も含め、洪水時にどのような攪乱を受ける場であるか、情報があるとよい。

○協議会で議論が出た場所について、現地で確認できる印を用意すると良い。また、協議会では航空写真や地図で位置がわかるようになるとよい。

以上